



秋田県由利本荘市の在宅連携の会を訪問

城西大学経営学部教授 伊関友伸

秋田県由利本荘市の 多職種・多機関の連携の会

2018年9月11日、秋田県由利本荘市の医療介護の在宅連携多職種多機関連携の会の招きで、現場訪問をした。連携の会は、5年前にカンファレンスの会として始まり、月1回所属組織に関係なく医療介護福祉関係者が集い、在宅知識の確認や症例検討などを行っている。会の開催回数が60回を超え、その記念講演会ということで筆者が呼ばれた。会のメンバーの職種は多様で、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、介護職員などが参加し、その所属も病院、訪問看護ステーション、調剤薬局、介護施設法人など多機関に及んでいる。

専門家チームによる摂食・嚥下ケア

会が進めている在宅診療の特徴に、摂食・嚥下障害ケアと糖尿病重症化予防がある。摂食・嚥下障害ケアは、患者の食べる力を支援

するケアである。摂食・嚥下障害を起こすと、飲食ができないことによる栄養状態の低下や脱水、食べ物が気道に入ることによる誤嚥性肺炎、「食べる楽しみ」を失うことによる生活の質や生きる活力の低下を引き起こす。

由利本荘市では、早期の病院の退院、在宅生活を行うために、急性期基幹病院である由利組合総合病院(626床)の糖尿病代謝内科において、救急外来から呼吸リハや退院支援を開始し、入院2日以内に経口摂取を開始できる口腔ケアや家族の食事介助技術の指導を実施している。1口も食べていなくても希望があれば自宅に戻り、退院当日から訪問看護、訪問薬剤管理、訪問栄養指導、訪問リハビリが導入され、食事の摂取への支援と肺炎等の症状再発のモニターが行われる。

特に、食事介助については、ミキサー食やゼリー食の作り方、多様なレシピのアドバイス、食べ物が見える角度や箸やスプーンで口に運びやすい角度などの方法を専門職から患者や家族に分かりやすく説明が行われる。入

院日数が短く、在宅で食事を可能とすることで、高齢者のADL(日常生活動作)の低下が抑制できている。

今回、市内の3軒の在宅診療に同行させていただいた。どのお宅も通常、胃瘻や鼻からのチューブ挿入などの経管栄養法が行われるレベルの高齢者であるが、専門職の支援や家族の食事介助の技術が高いこともあり、食事を摂られていたのが印象的であった。

専門医の負担を軽減する チームによる糖尿病重症化予防

糖尿病重症化予防も、多職種連携によって進められている。由利組合総合病院糖尿病代謝内科で治療を行い、認知症を合併している高齢入院患者は早期に薬剤師、訪問看護師、管理栄養士などの多職種がチームを組む在宅治療に移行する。高齢化の進む由利本荘市では、糖尿病に加えて認知症のある人も多い。在宅認定看護師が中心となり、インスリン注射の指導や服薬・栄養指導、摂食・嚥下



NPOが事務局をつとめる歯科医黒岩恭子氏の口腔ケア・リハビリ実践セミナー

ケアなどが行われ、在宅生活を可能としている。

実際、由利組合総合病院糖尿病代謝内科における糖尿病の入院患者は、2015年度は76名、平均在院日数が8・82日であったが、2018年度（8月末までのデータ）は11名、平均在院日数が3・45日に減っている。透析回避や入院患者・日数の減少は医療費の抑制にもつながっている。

医師不足が深刻な由利本荘・にかほ医療圏

の病院において、糖尿病専門医は由利組合総合病院に1名在籍するだけである。現在の医師が赴任する前は、専門医不在の状態が10年近く続いていた。多職種が連携する在宅体制が確立していることで、糖尿病専門医の入院や外来の仕事が軽減される。在宅体制が確立していなければ、医師の負担が過剰となり、疲れ果てて退職に至る危険性がある。

由利本荘市の多職種連携を支えているのが、医療介護職の持つ専門性の高さである。特に、看護師については、訪問看護認定看護師や摂食・嚥下障害看護認定看護師の有資格者が市外から赴任してきている。これは、由利本荘市役所のまるごと営業本部仕事づくり課が認定看護師等の専門職を移住・定住に結びつけている結果であり、全国の自治体において学ぶべき事例であると考えられる。

NPO法人由利本荘にかほ市民が健康を守る会

連携の会の中心メンバーの一人が、由利組合総合病院の谷合久憲医師である。谷合医師は東京都出身で、日本医科大学を卒業後、縁あって由利本荘市で勤務するに至っている。由利本荘市の土地と人柄が好きになり、奥様とお子さんだけでなく、ご両親も由利本荘市に移住されている。父親の憲明氏は、「NPO法人由利本荘にかほ市民が健康を守る会」の理事長となり、地域住民が主体的に健康を

維持するためのまちづくり活動に活躍されている。空き住宅を改装した事務所では、ご母堂がカフェを運営し、連携の会の会合は、このカフェでコーヒーを飲みながら行われている。筆者の講演会後の懇親会も、カフェで行われ、美味しい手料理を堪能しつつ、会のメンバーの活動の報告をお聞きした。とても楽しく、勉強になった一夜であった。由利本荘市での専門職と市民が連携した、保健・医療・介護の地域づくりが今後どのように発展していくか、期待したい。

タイトルの「アスクレピオスの杖」とは、ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた蛇クサシヘビの巻きついた杖。医療・医療の象徴として世界的に広く用いられているシンボルマークである。

筆者プロフィール

伊関友伸 (いせき ともとし)

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究テーマは、行政評価、自治体病院の経営、保健・医療・福祉のマネジメント。総務省公立病院に関する財政措置のあり方等検討会委員など、数多くの国・地方自治体の委員等を務める。著書に「まちに病院を!」(岩波ブックレット)「自治体病院の歴史 住民医療の歩みとこれから」(三輪書店)などがある。